

A Comparative Study of Changes in University Students' Communication and Behavior
in Japan and the United States during the COVID-19 Pandemic

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミック下における

日本とアメリカの大学生のコミュニケーションおよび行動の変化に関する比較研究

社会システム研究科 文化・言語専攻

2024M43001 進 志暢

【要旨】

本研究は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）におけるパンデミックが日本およびアメリカの大学生のコミュニケーションと行動にどのような変化をもたらしたのかを、文化的背景の違いに着目しながら比較・分析した研究である。特に、マスク着用、オンライン授業、メンタルヘルスという3つの側面に焦点を当て、コロナ禍前（～2020年3月）、コロナ禍（2020年4月～2023年4月）、ポスト・コロナ（2023年5月～）における変化を明らかにすることを目的としている。

コロナ禍前の日本は、集団主義、ハイ・コンテクスト文化、不確実性回避が高い国であり、調和や空気を読むことが重視されていた。そのため、マスク着用においても、周囲の視線や同調圧力が大きく関与していた。一方、アメリカは個人主義、ロー・コンテクスト文化、不確実性回避が低い国であるとされており、マスクは日常的なものではなく、自己表現や個人の判断が尊重される文化的特徴が見られた。

コロナ禍に入ると、両国の大学生は急激な生活様式の変化を余儀なくされた。先行研究や本研究で実施したアンケート調査から、日米の多くの学生がマスクを着用していたことが明らかになった。ただし、その着用理由には明確な違いが見られた。日本の学生は「ルールだから」、「周囲の人にうつしたくない」という回答が多く、集団規範や同調圧力が行動に強く影響していた。一方、アメリカの学生は「自分や家族を守るため」といった個人的判断に基づく理由を多く挙げており、同じ行動であっても動機が異なることが示された。その後、2022年から2023年にかけて、アメリカでは徐々に着用率が低下し、「必要性を感じなくなった」「周囲も外し始めた」といった理由から、マスクを使用しない学生が増加した。2023年以降、日本では一定数が引き続き特定の場所や場面でマスクを着用していたのに対し、アメリカでは常時着用している人はいなかった。

マスクがコミュニケーションに与えた影響については、日本人学生の7割以上が「話しにくさ」や「聞き取りにくさ」を経験しており、特に表情が見えないことによる理解の困難

さが強調された。多くの学生が「会話において表情は重要である」と回答しており、日本のハイ・コンテクスト文化においては非言語情報が重要な役割を果たすため、マスクは他人の意図を理解するのを難しくし、コミュニケーション上の負担となっていた。一方、アメリカの学生の多くは、マスク着用による会話上の困難をあまり感じておらず、表情が見えなくても大きな支障はないと回答しており、言語情報中心のコミュニケーション様式が反映されている。

オンライン授業に関しても、アンケート結果は両国共通の課題と文化差の両方を示している。カメラ使用については、両国ともに「教員の指示に応じてオン・オフを切り替える」という回答が最も多かったが、日本の学生はカメラをオンにすることへの強い抵抗感を示し、プライバシーへの不安や他者の視線を意識する回答が多く見られた。アメリカの学生も集中力の低下や孤立を感じていたが、チャット機能を活用して対面授業と同程度の発言をするなど、オンライン環境への適応は比較的柔軟であった。

オンライン授業への適応については、両国ともに個人差が大きかった。日本では半数程度の学生が比較的早く慣れた一方で、教員やクラスメイトとの意思疎通がうまくいかず、ストレスを感じた学生が6割近く存在した。それに対し、同様のストレスを感じたアメリカの学生は少数であった。カメラをオンにすることが学習に有益であったと感じた学生は、日米ともに2割程度にとどまり、多くの学生は学習効果への大きな影響を感じていなかった。

メンタルヘルスの面では、日本・アメリカ双方の学生がコロナ禍に不安や抑うつ、孤独感の増加を感じていた。日本の学生は、ポスト・コロナ期に回復の兆しを示していたのに対し、アメリカの学生は部分的な回復が見られたものの、コロナ禍前の水準には戻っておらず、不安やストレスが完全には解消されていなかった。

さらに本研究では、「アジャストメント・カーブ」をコロナ禍の社会変化に応用し、人々がどの時期にどのような段階を経てパンデミック生活に順応していった過程を示している。

以上の結果から、本研究は新型コロナウイルス感染症が大学生のコミュニケーション様式や行動に大きな影響を与えたこと、そして、その影響の現れ方が文化的背景によって異なることを明らかにしている。パンデミックは新たな行動様式を生み出しただけでなく、日米それぞれの文化的特徴をより顕在化させる出来事であったと結論づけられる。